第二章　若紫の物語

［第一段　紫の君と鼻を赤く塗って戯れる］

二条院（にでうのゐん）におはしたれば（にお帰りに成ると）、*紫の君、いともうつくしき（とても瑞々しい）*片生ひにて（思春期で）、「紅はかう（赤はこんなにも）なつかしきもありけり（良い色だったのか）」と見ゆるに（と思えるほど）、無紋の（無地の）桜の（桜色の）*細長（着物を）、なよらかに着なして（柔かそうに着て）、何心もなくて（ただ平然と）ものしたまふさま（しているだけの姿が）、いみじうらうたし（天性の可愛らしさだった）。　*藤壺の姪にあたる若君、紫のゆかり。　*「片生ひ（かたおひ）」を文字に添って言い換えれば〈半成人〉で、意味を砕けば〈大人に成り掛け〉だから、紫の君はこの年には 11 歳で初潮があったのだろう。意味からすると〈思春期〉という言い換えで良さそうだが、取って付けた様で生々しさに欠ける。あまり気に入らない。　*「細長（ほそなが）」の形状については考証での定説を未だ見ていないらしい。むしろ、この「源氏物語」の記述などから類推されているとの事だが、此処では具体的な描写は無い。

古代の（こたいの、古風な）祖母君の（おばぎみの、故尼上の）御なごりにて（御躾で）、歯黒めも（お歯黒も）まだしかりけるを（まだしていなかったのを）、ひきつくろはせたまへれば（源氏が黒く染め引き繕いさせ為さったので）、眉のけざやかになりたるも（紫の君は眉の鮮やかさが際立って）、うつくしうきよらなり（見事に綺麗だった）。

「心から（我ながら）、などか（どうして）、かう（こうも）憂き世を見あつかふらむ（詰まらない事に関っているのだろう）。かく（こんなに）心苦しきものをも（尊い者が居るというのに）見てゐたらで（世話もしないで）」と、思しつつ（と源氏は御思いに成って）、例の、もろともに（いつものように一緒になって）雛遊びしたまふ（人形遊びをしなさる）。

絵など描きて（紫の君は絵を描いて）、色どりたまふ（色付けしなさる）。よろづに（何かと）をかしう（面白げに）すさび散らしたまひけり（気の向くままに書き進め為さる）。我も描き添へたまふ（源氏も一緒になってお絵描きしなさる）。

髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画に描きても、見ま憂きさましたり（醜かった）。わが御影の鏡台にうつれるが（自分の顔が鏡に映るのが）、いときよらなるを見たまひて（とても綺麗なのを御覧になって）、手づからこの赤鼻を描きつけ（自分で花を赤く塗って）、にほはして見たまふに（赤鼻にしてごらんに成ると）、かくよき顔だに（斯くも端正な顔立ちでも）、さて（このように）まじれらむは（汚点が混じれば）見苦しかるべかりけり（変になってしまうものだった）。姫君、見て、いみじく笑ひたまふ（大笑いしなさる）。

「まろが、かくかたはになりなむ時（こんな変な顔になったら）、いかならむ（どう思う）」とのたまへば（と源氏がお聞きに成ると、紫の君は）、

「うたてこそあらめ（嫌になります）」とて（と言って）、さもや染みつかむと（そのまま赤鼻に染め付きはしないかと）、あやふく思ひたまへり（心配そうに源氏の顔を御覧になった）。（すると源氏は）そら拭ごひ（そらのごひ、拭き真似）をして、

「さらにこそ(少しも)、白まね(しろまね、白くならない)。用なき(無益な)すさびわざなりや(思い付きをしてしまったものだ)。内裏に(うちに、帝に)いかにのたまはむとすらむ(どう申し上げたらいいものか)」と、いとまめやかにのたまふを(真面目くさって言いなさると)、いといとほしと思して(紫の君は本気で大変だと御思いになって)、寄りて(進んで)、拭ごひたまへば(拭き取りなさり)、

「*平中がやうに色どり添へたまふな(平中みたいに墨付け為さいまするな)。赤からむはあへなむ(赤ならまだいいけれど)」と(と言って)、戯れたまふさま(ふざける様子は)、いとをかしき(とても仲の良い)妹背(いもせ、兄妹)と見えたまへり(お見受け致します)。　*「平中物語(へいちゅうものがたり)」については、≪平安中期の歌物語。作者未詳。天徳3～康保2年(959～65)ごろまでの成立とされる。平中とよばれた平貞文を主人公とした、恋愛説話38段からなる。(Yahoo辞書)≫、とある。ただ此処の文の「注」としては、「露草色の郷(http://homepage2.nifty.com/toka3aki/)」というWebサイトの≪ここでの「平中」は、色好みなれど成就せずという歌物語上の登場人物として、匿名の女性と歌を贈答していくのです。されど、ある女は返事がなく、ある女はその親に妨害され、ある女にはその態度に平中が愛想を尽かし、結局は「やみにけり」、またも別の女を捜すという、循環的な物語でもあります。なお、後の時代である「源氏物語」の「末摘花」や「古本説話集」では、嘘泣きすべく水を顔につけたら墨と間違えて顔が真っ黒になったという、滑稽な「平中」像が語られるようになります。ここでの「平中物語」では、そのような「おこ」としての主人公への変化はまだ遂げられていません。その点で「平中物語」は、平安後期以降の面白みを目指した文学とは一線を画した、平安時代前中期の色彩がまだ強い歌物語なのです。≫という解説が参考になります。

日のいとうららかなるに(初春の穏やかな日に)、いつしかと(いつの間にか)霞みわたれる(霞が掛かった)梢どもの(枝先の)、心もとなきなかにも(何時芽吹こうかと迷う中にも)、梅はけしきばみ(梅は蕾もふくらみ)、ほほ笑みわたれる(咲き掛けているのが)、とりわきて見ゆ(目に付く)。階隠(はしかくし、寝殿正面の屋根付き階段)のもとの紅梅、いととく(特に早く)咲く花にて、色づきにけり(既に色付いていた)。

「紅の花ぞあやなく疎まるる、梅の立ち枝はなつかしけれど　(和歌6-14)

「何の因果か赤い鼻、内埋めきれない擬かしさ　(意訳6-14)

*「赤い花だけは好きじゃない、梅の枝ぶりは見事だけれど」という字面は其の儘、「くれなゐのはなぞ(赤い鼻だけは)あやなくうとまるる(変だから好きじゃない)、埋めの(廃れた、控えめな)立ち枝は(一族は、立ち居振る舞いは)なつかしけれど(宮筋だけれど、嫌いじゃないが)」と、もう其の儘である。

いでや(いや全く)」と(と源氏は)、あいなく(儘為らない巡り合わせに)うち呻かれたまふ(符と呻き声を立て為さる)。(さても)*かかる人びとの末々(すゑずゑ、行く末は)、いかなりけむ(如何なる事やら)。　*まるで連続テレビドラマの時間切れのような唐突な纏め。

(2009年4月2日、読了)　(2010年3月24日、再読了)